

# 『花のノートルダム』における性的差異の ポリティクス

荒 木 敦

Mais comme nous ne pouvons aimer ce qui est hors de nous, il faut aimer un être qui soit en nous, et qui ne soit pas nous.

— Pascal<sup>1)</sup>

## はじめに

リュス・イリガライは、その『性的差異のエチカ』の冒頭で、次のような問いかけをしている。

「性的差異は私たちの時代の諸問題の一つ、あるいは私たちの時代の考えなければならない問題そのものを表わしています。それぞれの時代には——ハイデガーによれば——、考えるべき事柄が一つあります。ただ一つだけです。性的差異はおそらく現代のただ一つの考えるべき事柄でしょう。思索されることによって、私たちに「救い」をもたらすような現代の事柄ではないでしょうか？<sup>2)</sup>」

もちろんこの「ただ一つの事柄」という表現には、戦略的誇張があるだろう。性的差異は、現実的には、人種間、国家間、宗教間、階級間、等々の対立的諸差異の中の一差異でしかあり得ない<sup>3)</sup>。しかし、それでもなお、ある意味では特権的差異として、性的差異が機能している局面は存在するし<sup>4)</sup>、少なくともジュネの作品において、セクシュアリティをめぐる言説が極めて重要な位置を占めており、改めて検討に値する問題の一つであるということ、この点にはおそらく異論がない。

ジュネにおけるセクシュアリティのテーマは、同性愛の問題として、もちろん常に言及されている。しかし多くの場合、同性愛は悪や裏切りや泥棒といった他の諸テーマとしばしば同列に並べられ、その内部において問題とされるべき性的差異は、十分に明瞭なパースペクティブのもとには、研究の対象となっていないように思われる。本論では、従って、同性愛そのものを一つの固定した事象として捉えて他の諸テーマとのパラレルな関係を主張するのではなく、セクシュアリティをめぐる場において、どのような性的差異が発生しており、どのようにその差異が主体＝個

人と関わっているのか、という点に注目しながらテキストの分析を試みたい。そしてこの場合、差異を語ることは、その間のしばしば複雑な力と力との関係を問題にする作業に他ならない、ということを忘れてはならないだろう。

## I. 性的二元論

ジュネの最初の小説である『花のノートルダム』*Notre-Dame-des-Fleurs* は、末尾に《*Prison de Fresnes, 1942*》の日付を持ち、1944年に匿名で発表されている。小説は、一貫性を持ち時間の流れを追うような、十九世紀的な意味での筋を備えてはいない。また、語り手であるジャンによって、物語の人物や出来事に対する言及が、それらが虚構であることを強調するようなやり方で、しばしば繰り返される。そこで語られるのは、前半では主に、tante のディヴィーヌと mac<sup>9)</sup> のミニョンそして殺人犯の少年花のノートルダムとの三角関係であり、後半ではミニョンに代って、黒人セック・ゴルギが重要な役割を演じることになる。そしてディヴィーヌのパリでの生活と共に、ルイ・キュラフロワと呼ばれていた少年時代のエピソードが何度も挿入される。ディヴィーヌの死とノートルダムの有罪宣告は、それぞれ冒頭部と終り近くで語られている。

このように、小説の登場人物の大部分は男性であるが、性的差異は、セックス(生物学的差異)とジェンダー(文化的差異)<sup>7)</sup>との複雑な織物であるゆえに、異性間のみならず、同性間でも生じ得ると考えられる。ただし、例外的に重要な二人の女性、キュラフロワの母親エルネスティーヌと、彼の恋人だった少女ソランジュに関しては、ここで詳しく語るができない。理由はいくつかある。まずキュラフロワの、彼の父親(この父親は彼が幼いうちに死亡している)への同一化が不十分なため、母子の精神分析的関係が複雑であり、独立した考察が必要であると思われること。また、二人の女性を「女」という一般概念でくくるのを避けるならば、*féminité* と *maternité* の区別に関する慎重な議論<sup>8)</sup>が必要であること。そして、最大の理由は、素朴な生物学的決定論<sup>9)</sup>を回避して性的差異をより精確に見定めるためには、個人としての女性を一時的にカッコに入れることが、方法論的に有効かつ必要であると考えられるからである<sup>10)</sup>。

さて、登場人物の男性はおおよそ二種類に大別できるように見える。グループの一方は、「男らしい」、男性的特質が明らかな人物である。ミニョン、セック・ゴルギ、(キュラフロワ=ディヴィーヌの恋人の)アルベルトやガブリエル、(ノートルダムの相棒)マルケッティ、などがこの範疇に入る。彼らは mac のタイプを形作る。もう一方のグループは、ディヴィーヌやミモザその他の、tante と呼ばれる人種で構成されている。

この二者がどのように異っているか、まずディヴィーヌとゴルギの場合を見ることにしよう。その差異はセクシュアリティに関わる場面で、最も特徴的に読み取れるように思われる。

Avec Gorgui, Divine fut vite en l'air. Il joua avec elle comme le chat avec la souris. Il fut féroce. L'obligeant à rester allongée sur le divan, immobile, les bras le long du corps, il s'arquait au-dessus d'elle, son membre battant de coups durs son ventre noir et dur : un bouclier. Il fit pleurer Divine. Il ne voulait pas qu'elle touchât. D'un seul coup, il se laissa tomber sur elle. La verge de Divine se courba. Gorgui baisa sa bouche. Sa langue était dure, sévère. Elle forçait les lèvres, les dents, et une fois entfee, accomplissait son labeur de vrille, de pieuvre, de sangsue, de membre. Il furent mouillés l'un et l'autre.

Sa joue posée sur la poitrine noire — sa perruque est bien collée — Divine repense à cette langue si forte quand la sienne est molle. Tout en Divine est mou. Or, mollesse ou roideur ne sont qu'une question de tissus où le sang abonde plus ou moins, et Divine n'est pas anémiée. Elle est celle qui est molle. C'est-à-dire dont le caractère est mou, les joues molles, la langue molle, la verge souple. Tout cela est dur chez Gorgui. Divine s'étonne qu'il puisse y avoir relation entre ces différentes choses molles. Puisque dureté équivaut à virilité... Si Gorgui n'avait qu'une chose dure... et puisque c'est une question de tissu. L'explication fuit Divine, qui ne songe plus que ceci : 〈Je suis la Toute-Molle.〉<sup>11)</sup>

この引用から、ゴルギとディヴィーヌの身体や行動、性格を描写するにあたって、特徴的と思われる表現を抜き出してみる。

ゴルギ : féroce, durs, dur, dure, sévère, forte, (roideur), dur, (dureté), (virilité), dure

ディヴィーヌ : molle, mou, (mollesse), molle, mou, molles, molle, souple, (molles), Toute-Molle<sup>12)</sup>

ここでは〈dur〉と〈molle〉が執拗なまでに繰り返され、ゴルギの硬さとディヴィーヌの柔らかさの対照が強調されている。これは勿論、ただ物理的特性だけを語っている訳ではない。硬さは意志の強さや厳しさ、タフさを同時に意味し、それはまたすぐれて男性的な特質と見做される。〈dureté équivaut à virilité〉というように、二つは結び付けられ、等価なものされる。一般的に viril とは単に「男の」というだけでなく、「男らしい」、「雄々しい」、「力強い」といった肯定的価値を表わす。Gorgui は、ペニスを指す隠語 guigui との音声上の繋がり<sup>13)</sup>からも、virilité を象徴する存在であると言える。一方 mou は、viril の反意語 efféminé としばしば同義であって、「女々しい」、「力の弱い」、「軟弱な」といった否定的な価値を表現している。

ここで、ゴルギとディヴィーヌの関係を示すような表現を更にひろうと、次のようなものがある

る。

ゴルギ : chat, l'obligant, au-dessus d'elle, fit pleurer, se laissa tomber sur elle, forçait, vrille, pieuvre, sangsue

ディヴィーヌ : souris, immobile

ここでの両者の差異は、単なる平面的な違いなどではない。そこには歴然と権力関係が存在している。無慈悲なゴルギは、ディヴィーヌを専ら暴力的享楽の対象として扱う。相手を攻撃し、服従させる(《l'obligant》, 《forçait》, 《fit pleurer》)。また、《au-dessus d'elle》, 《se laissa tomber sur elle》といった上下関係の表現は、彼の優位性を強調するものと考えられる。そして《vrille》, 《pieuvre》, 《sangsue》といった言葉が、その攻撃性のメタファーであることは言うまでもない。対してディヴィーヌは、《immobile》で、下に組み敷かれる存在に甘んじる。要するに、《chat》/《souris》の関係、強者と弱者、攻撃性と受動性、支配と屈従の関係がここには見られると言ってよいだろう。

また、ディヴィーヌとミニョンの関係では、ミニョンは殆どディヴィーヌの稼ぎで生活しており、小説の最後も彼がディヴィーヌに送金を求める手紙で終わっている。しかしディヴィーヌは、必ずしもそれに見合う愛情を与えられる訳ではない。カフェの男たちは彼女を《Pédérasque<sup>14)</sup>》と蔑むが、ミニョンもまた、ディヴィーヌとモモザの喧嘩に対しては、それを傍らで眺めて、《Elles sont trop cons toutes deux.》, あるいは、《C'est vache les tantes.<sup>15)</sup>》と軽蔑的な感情を抱くのである。「女々しい」tanteは、「男らしい」macに対して、体力的に、経済的に、あるいは道徳的に劣った存在であると考えられているように見える<sup>16)</sup>。

しかし果たして、このディヴィーヌら tante の特徴である劣位性は、単に体力といった物理的・生物学的差異のみに由来しているのだろうか。おそらくそうではない。その点を明らかにするためには、mac だけではなく tante によっても劣位の価値と見做されるものは何なのかを、我々は考えてみなくてはならない。

Un jour, Mignon, oisif, rencontra dans la rue une femme d'une quarantaine d'années, qui devint subitement folle d'amour pour lui. Je hais assez les femmes amoureuses de mes amants pour avouer que celle-ci saupoudre de riz blanche sa grosse figure rouge. [...] Cette femme (parlant d'elle avec Divine, il disait «la morue») et Divine («cette femme») ignorait la vertu de cette attitude et, à partir de certains détails, jusqu'à l'attitude même; mais le charme sur elle n'agit qu'avec plus de promptitude. Elle sut, et sans trop savoir pourquoi, que Mignon était un bandit, car pour elle un bandit est surtout un mâle qui bande. Elle en devint folle. Mais elle venait trop tard. Ses formes rondes et sa féminité molle n'agissaient plus sur Mignon, habitué maintenant au dur contact d'une verge raide.

Aux côtés de la femme, il restait inerte. Le gouffre l'effrayait. Toutefois, il fit quelque effort pour surmonter son dégoût et s'attacher cette femme, afin d'avoir par elle de l'argent. Il se montrait galamment empressé. Mais vint un jour où, n'en pouvant plus, il avoua qu'il aimait un — il eût dit garçon un peu plus tôt, mais maintenant il doit dire un homme, car Divine est un homme — un homme donc. La dame fut outragée et prononça le mot de tapette. Mignon la gifla et partit<sup>17)</sup>.

ここで軽蔑的に語られているのは、女性に他ならない。ただしそれは個人としての女性ではなく、《Je hais assez les femmes amoureuses de mes amants》、あるいは《une femme d'une quarantaine d'années》とあるように、名前が与えられていない女性、女性一般、もしくは *féminité* としての女性である。彼女は《la morue》、《cette femme》と呼ばれ、蔑みの対象とされる。こうした《*féminité molle*》に対して、上述したように、《*dur*》、《*raide*》は優位な価値を表していると考えられるが、ここではそれはミニョンの形容ではない。ディヴィーヌの属性である。つまり *mac/tante* では *dur/molle* という優劣関係があるが、*tante/femme* では *tante* の方が *dure* であり、女性に対して優位項となるのである。

更に *féminité* は、《Le gouffre l'[Magnon]effrayait.》というように、男性を、肯定的価値としての *virilité* を脅かす存在でもある。ディヴィーヌもやはり、女性に対する嫌悪を次のように表わす。

L'éventail aux doigts de Divine ne se déplissa pas. Aussi bien, Divine ne prenait pas l'éventail pour donner le change; elle eût été contrite de se voir confondue avec l'une de ces horribles femelles à tétons. «Oh! ces femmes, les mauvaises, les mauvaises, les abjectes, les filles à matelots, les gueuses, les pas-propres. Oh! ces femmes, que je les hais!» disait-elle<sup>18)</sup>.

女性は《*horribles*》、《*mauvaises*》、《*abjectes*》、《*pas-propres*<sup>19)</sup>》な存在であり、《*filles à matelots*》、《*gueuses*》といった、軽蔑し憎悪すべき対象に他ならない。ここでもやはり女性は、「個」としての女性ではない。名前を持たない、類的存在としての女性、つまり *féminité* であって、それが忌わしいものとして描かれているのである。

ディヴィーヌの女性的性格は誰の目にも明らかだろう。Divine という名前、文法的に女性として語り描写されること、同性愛における受動的役割、等々。そうした女性的なディヴィーヌが女性を貶めることは、一見すると矛盾した行動のように思われる。もちろんこの嫌悪は、恋人の男性をめぐってのライヴァル関係からも説明できるだろう。しかし、より根本的な理由はおそらく

別の処にある。

前述のように、mac/tante, tante/femme の関係は、virilité (masculinité)<sup>20</sup>/féminité の二項対立を軸に優劣を構成している。この性的ハイアラーキーにおいては、tante は mac より女性的である故に劣位である。しかし女性は tante より更に女性的であり、より多くの féminité を身にまわっているために、結局は tante から軽蔑されることになるのである。

さて、ケイト・ミレットはこれら男性の二種類のグループについて、以下のように述べている。「ジュネからすれば、個々人の運命によって位階が決まるのだから、性別役割は劣者と優者の二極にきっぱり確立される。ノートルダムやビュルカン[『薔薇の奇蹟』に登場する少年]のような年若なしたたか者は、見たところ変わり種だが、より良い運命に向かう途上のおたまじゃくしの存在に他ならない。男性的・女性的について、ジュネの定義以上に残忍で不快な定義を見つけるのは難しいだろう。というのは、ジュネの定義は現に世間に通用しているものを全く誇張してみせるからである。男性的とはたち優る強さであり、女性的とは劣った弱さである。<sup>21</sup>」

mac/tante の性的差異の構造的モデルは、男／女の関係の中に見い出される。ただし生物学的性差に基いていない故に、そこでは virilité/féminité の二項対立が一層鮮明に見て取れる。そこには強者と弱者の関係がある。通常は男／女のセックスに重ね合わされているため、自然なものと考えられている性的差異、それがどれほど文化的・構造的なものであるかを、小説は我々に教えてくれるのである。

## II. ノートルダムまたは構造の余白

さて、確かに男性の二グループ間には差異が存在する。しかし、ではノートルダムは？ その名前がタイトルになっている以上、取るに足らない例外として処理する訳にはいかない。ミレットは、ノートルダムが mac に成長する途上の存在であると言っているが、実際には、彼は少年のまま死刑の宣告を受けるのであるから、この意見は最終的に推測の域を出ない。果たして小説中のノートルダムは、前述の二元論的対立にとって何者であるのか、またあり得るのか？ この問いかけが是非とも必要となる。

まず、彼とディヴィーヌの関係を見よう。

Ils s'embrassèrent, mais déjà dans le baiser, Notre-Dame, plus fougueux et plus fort, de sa langue vibrante trouait la bouche de Divine. Elle écartait lèvres, dents, et s'introduisait, victorieuse. Quand Divine voulut passer à l'acte définitif, elle chevaucha Notre-Dame déboutonné, couché sur le sol, le membre brandi hors de la braguette. Elle

allait de sa verge un peu souple l'enfiler — il souriait toujours, amusé — quand la bosse de la dure queue de l'adolescent, plaquée et bondissante sur son ventre, donna à Divine ce vertige connu d'elle : l'abandon au mâle<sup>22)</sup>.

ここでも virilité/féminité を軸にした対立は明らかで、ノートルダムの方はその力強さが強調されている(《fougeux》, 《fort》, 《victorieuse》)。彼の《dure》に対して、ディヴィーヌの《souple》が対照を成す。ディヴィーヌは virilité の証明である《l'acte définitif》に失敗し、結局は《l'abandon au mâle》とあるように、ノートルダムに対して受動的・女性的な存在に甘んじる。

しかしながら、ノートルダムが、常にこのような男性的な男、mac として描かれているとは限らない。ディヴィーヌが彼について、次のように語る場合もある。

Elle [Divine] fut aidée par Mimosa, qu'elle rencontra dans la rue. Mimosa, vieille Dame :

— J'l'ai vue! Ba, Be, Bi, Bo, Bu, j'l'aime ta Notre-Dame. Toujours aussi fraîche, toujours aussi Divine. C'est elle, la Divine.

— Elle te plaît? (Entre elles, les tantes parlaient de leurs amis au féminin.) Tu la veux?

— Tiens, tiens, elle ne veut donc plus de toi? ma pauvre vieille.

— Notre-Dame, elle m'emmerde. D'abord, elle est stupide, et je la trouve molle<sup>23)</sup>.

実は、Notre-Dame-des-Fleurs という名前に、既に féminité の刻印は明らかであるとも言える。その彼がここでは、ディヴィーヌとミモザによって《elle》で語られ、《fraîche》, 《Divine》と形容され、更には《molle》という評価を受ける。ここで、ノートルダムは、その féminité が強調され、あたかも tante の側に分類されるかのように見える。

また別の所では、《Notre-Dame était coquette plus qu'une tante<sup>24)</sup>》とされ、パーティーに出かける際、ディヴィーヌの服を借りて女装したりもする(《La robe, qui est à tournure, fait bien saillir sa croupe évocatrice de violoncelles. Mettons une fleur de velours dans ses cheveux ébouriffés<sup>25)</sup>》)。しかしながら次の引用では、だからといって mac に対する劣位の性格が、ノートルダムに見られる訳ではないように思われる。

Le chauffeur ouvrit la portière et Notre-Dame monta d'abord. Gorgui, à cause de sa situation dans le groupe, eût dû passer le premier, mais il s'écarta, laissant l'ouverture libre à Notre-Dame. Que l'on songe que jamais un mac ne s'efface devant une femme, moins encore devant une tante, ce que pourtant, vis-à-vis de lui, était devenu cette nuit

Notre-Dame; il fallait que Gorgui le plaçât bien haut. Divine rougit quand il dit :

— Passe, Danie<sup>26)</sup>.

これはパーティーの帰りの場面なのだが、ここでは、ノートルダムははっきり tante であるとき、それに対する mac 優位の原則が再確認されるとともに、同時に一方ではその優劣関係が廃棄されている。ゴルギはここで、tante 一般に対するような見下した態度を取ってはいない。ノートルダムには、mac か tante かといった単純な二元論的分类は適用できないように見える。

では、ノートルダムは mac でありかつ tante であると言うべきだろうか？ 素朴な定義をすれば、確かにそう言えないこともない。しかしながら、mac または tante である、と言った方がむしろ正しい。ノートルダムは、二項対立から全く独立した第三項、同一性を確保した自己完結的な存在なのではない。性的差異の二元論は、ノートルダムが他者と向きあう場合、あるいは一見単独である場合ですら、それ自体完全に無効になるとは考えられない。性的差異は確かに微妙なものに成り得る。しかし、にもかかわらず、差異そのものが根柢から消失して、分節化されない一様な混沌や、非性的な精神的超越性<sup>27)</sup>が現われるのではないのである。

ノートルダムは、ゴルギとディヴィーヌの間で見られたような性的差異の、いずれか一方の側に固定されてはいない。他者との関係において、ノートルダムは男性的であったり、あるいは女性的であったりする。そして更に、それは必ずしも他者が誰であるかによって、一義的に決定されている訳でもない。同一人物に対してであっても、場の微妙な力学によって、一時的・部分的にその性格は変化し得る。

したがって、ノートルダムに関しては、virilité/féminité の差異が、自己と他者との間で生じるだけではなく、自己の内部においても生起していると考えられる。性的同一性は、そこでは一時的・部分的にしか語り得ない。個人は実際のところ、完全な性的統一性を把持してはいない。individu は、性的差異の発生に従って、更に小さなレヴェルへと分割され、微分化され、その分割不能性という概念そのものを審問に付されるのである。

### III. 性的差異と全体性

上述したように、ノートルダムは単純な性的二元論のシステムに分類・還元できない。しかし、では、彼を唯一の例外として規定してよいものなのか？ 例外と規定するならば、その規定によって、彼を再び一つの実体=全体性で見做す危険性が生じるだろう。我々はそのように個人を特権化=全体化するのではなく、むしろ前述の二元論がどれほど適切なものなのか、どこまで有効性を持つものなのか、他の例に関していま一度検討してみるべきなのである。



ではまず、ディヴィーヌに関する次の引用を見よう。

Jusqu'à présent, elle n'avait aimé que des hommes plus forts qu'elle et légèrement, d'un poil, plus âgés qu'elle, plus musclés. Mais vint Notre-Dame-des-Fleurs, qui avait un caractère physique et moral de fleur : elle s'en amouracha. Quelque chose de nouveau, comme une sorte de sentiment de puissance, leva (sens végétal, germinatif) en Divine. Elle crut virilisée. Un espoir fou la fit forte, costaud, vigoureuse. Elle sentit des muscles lui pousser et sortir elle-même d'un roc taillé en forme d'esclave de Michel-Ange. Sans bouger un muscle, mais se bandant, elle lutta en elle comme le Laocoon saisit le monstre et le tordit. [...] Elle chercha des gestes mâles, qui sont rarement des gestes de mâle. Elle siffla, mit ses mains dans ses poches, et tout ce simulacre fut exécuté si malhabilement qu'elle paraissait être en une seule soirée quatre ou cinq personnages à la fois. Elle y gagnait la richesse d'une multiple personnalité. Elle courait de la fille au garçon, et les passages de l'une à l'autre — parce que l'attitude était nouvelle — se faisaient en trébuchant. Elle courait après le garçon à cloche-pied. Elle commençait toujours ses gestes de Grande-Evaporée, puis, se souvenant soudain qu'elle devait se montrer virile pour séduire l'assassin, elle les achevait dans le burlesque, et cette double formule l'enveloppait de merveille, faisait d'elle un pitre timide en bourgeois, quelque folle empoisonnée<sup>28)</sup>.

ここで読者は、ディヴィーヌの男性化を認めることができる。ノートルダムはある時は男らしい存在であるが、また時にはディヴィーヌよりも女性的な存在でもある。その場合、構造的位相関係によって、ディヴィーヌの方がより男らしい人物となる。《forts》, 《musclés》, 《virilisée》, 《forte》, 《costaud》, 《vigoureuse》, 《muscle<sup>29)</sup>》, 《virile》など、それまでのディヴィーヌには見られなかった特徴が、ここで現われる。

しかしながら、ディヴィーヌが完全に男性化し、macに仲間入り出来る訳ではない。《Elle chercha des gestes mâles, qui sont rarement des gestes de mâle》とある通り、《gestes mâles》と《gestes de mâle》の間には微妙だが明らかに差異が存在する。その距離を、ディヴィーヌは精確に測ることができない。それ故、《Elle courait de la fille au garçon》というように、彼女はどちらか一方の性に安住できず、分裂した存在であらざるを得ないのである。この分裂は次の引用からも確かめられる。

Puis, instantanément, Divine redevint la Divine qu'elle avait quittée durant la

descente de la rue Lepic, afin de penser plus prestement, car, si elle sentait <femme>, elle pensait <homme>. On pourrait croire que, revenant ainsi spontanément à sa véritable nature, Divine était un mâle maquillé, échevelé de gestes postiches; mais il ne s'agit pas de ce phénomène de la langue maternelle à laquelle on a recours aux heures graves. Pour penser avec précision, Divine ne devait jamais formuler à haute voix, pour elle-même, ses pensées. Sans doute, il lui était arrivé déjà de se dire tout haut : <Je suis une pauvre fille>, mais, l'ayant senti, elle ne le sentait plus, et, le disant, elle ne le pensait plus. En présence de Mimosa, par exemple, elle arrivait à penser <femme> à propos de choses graves mais jamais essentielles. Sa féminité n'était pas *qu'une* mascarade. Mais, pour penser <femme> en plein, ses organes la gênaient. Penser, c'est faire un acte. Pour agir, il faut écarter la frivolité et poser son idée sur un socle solide. Alors venait à son aide l'idée de solidité, qu'elle associait à l'idée de virilité, et c'est dans la grammaire qu'elle la trouvait à sa portée. Car, si, pour définir un état qu'elle éprouvait, Divine osait employer le féminin, elle ne le pouvait pas pour définir une action qu'elle faisait. Et tous les jugements <femme> qu'elle portait étaient, en réalité, des conclusions poétiques. Ainsi, Divine n'était vraie qu'alors. Il serait curieux de savoir à quoi correspondaient les femmes dans l'esprit de Divine et surtout dans sa vie. Sans doute, elle-même n'était pas femme (c'est-à-dire femelle à jupe); elle ne tenait à cela que par sa soumission au mâle impérieux, et pour elle, femme, non plus Ernestine, qui était sa mère<sup>30</sup>.

ここでは次のことが明らかにされている。まず、ディヴィーヌは<soumission au mâle impérieux>によって、それによってのみ、女性的存在であること。そして、<homme>/<femme> (これまでの言い方では, virilité/féminité) の分裂・対立が、ディヴィーヌの内部において生じていること、である。

ただしここでは、ディヴィーヌは生物学的に男性なのだから、結局その féminité は単なる演戯であり、virilitéこそが<véritable nature>であるのだ、という解釈はもはや単純に過ぎて成立しないだろう。<On pourrait croire que, revenant ainsi spontanément à sa véritable nature, Divine était un mâle maquillé, échevelé de gestes postiches; mais il ne s'agit pas de ce phénomène de la langue maternelle à laquelle on a recours aux heures graves.>以下の文章は、かなり曖昧で屈折しており、ここでその含意の全てを汲み尽くすことは到底できないが<sup>31</sup>、少なくとも、上述のような素朴な解釈を支持するものでは決してあり得ない。<Sa féminité n'était pas *qu'une* mascarade.>とある通り、ディヴィーヌの féminité は、単なる見せかけではない。それがただの<mascarade>であったなら、実はそこに差異は存在しない。そのような féminité は、真なる virilité の

同一性へ、疑似的差異としての多を包摂する一者へと、最終的には回収されてしまうからである。そうでなく、ここでは、性的統一性や自然な性別といった範疇に疑念を差し挟む差異、「あらゆる現前化過程から決定的に免れているような他性の標記<sup>32)</sup>」を見て取るべきなのである。

しかしこのような内的差異は、果たしてノートルダムと、ディヴィーヌなどの tante にのみ生じるものなのだろうか。次の引用は、そうではないことを示しているように思われる。

Mais Marchetti était beau. (Notre-Dame parle du chandail qui moulait son torse, pareil à du velours, il sent bien que là est enferm  le charme qui subjugue. La main de fer dans le gant de velours.) Corse blond à l' il... bleu. La lutte  tait... gr co-romaine. La chevali re... d'or. [...] Il dit que Marchetti, pris, sera rel gu . A la Rel gue, il partira. [...] Marchetti chantera des chansons avec la voix de Tino Rossi. Il fera son baluchon. Choisira les photos de ses plus belles ma tresses. Celle aussi de sa m re. Embrassera sa m re au parloir. Partira. Ce sera, apr s, la mer, c'est- -dire l'ilot du diable, les Noirs, les rumeries, les noix de coco, les colons coiff s d'un panama. La Belle! Marchetti fera la Belle! Il sera la Belle. Je m'attendris de penser   cela, et, sur ses beau muscles soumis aux muscles d'autres brutes, j'en pleurerais de tendresse. Le mac, le tombeur, le bourreau des c urs sera la reine du baigne. Ses muscles grecs,   quoi serviront-ils? On l'appellera Blulette, jusqu'  l'arriv e d'un voyou plus jeune<sup>33)</sup>.

この引用では、まず、mac の一人マルケッティの virilit  の賞揚が行われる (《La main de fer》, 《le mac, le tombeur, le bourreau des c urs》, 《muscles grecs》など)。しかし彼の virilit  もまた、他者との力関係の変化から完全に独立している訳ではなく、性的同一性は実は見かけほど確固たるものではあり得ない。他の逞しい囚人たちに服従 (《soumis》) し、彼は《la Belle》として振る舞い、《la Belle》そのものに成る。彼は徒刑場の《reine》と成り、《Blulette》と呼ばれるのである。

更にはまた、ミニョンに関して。《Mignon le vigoureux, tout et toujours en muscle et poils chauds<sup>34)</sup>》,あるいは《Mignon le dur, le froid, l'irr fragable, Mignon le mac<sup>35)</sup>》と形容される彼は、小説中で最も男らしい、mac の理想像的存在である。そのミニョンですら、次のように描かれる。

Se parlant de Mignon, Divine dit, joignant les mains en pens e :

— Je l'adore. Quand je le vois couch    poil, j'ai envie de dire la messe sur sa poitrine.

Mignon a mis quelque temps à s'habituer à parler d'elle et de lui parler au féminin. Enfin, il y parvint, mais ne toléra pas encore qu'elle lui causât comme à une copine, puis peu à peu il se laissa aller, Divine osa lui dire.

— T'es belle, en ajoutant : comme une bite<sup>36)</sup>.

ここで彼は《une copine》のように女性として呼びかけられ、更には《T'es belle [...] comme une bite(女性名詞であることに注意)》と形容される。ディヴィーヌは既に見た通り、全体的には女性的であるものの、実は内に virilité/féminité の分裂を抱え込んだ存在である。したがってディヴィーヌに向き合うミニョンもまた、その関係性において、完全な性的同一性なるものを保持し得ない。自らの内部の féminité が、他者を通じて回帰を果たす<sup>37)</sup>。そしてここで、何よりもその名 Mignon が、joli, charmant の同義語であり、子供や女の子への呼びかけに使われるということ、既にその名前の中に féminité が刻印されているということ、もう一度思い出す必要がある<sup>38)</sup>。

こうした内部における性的差異・分裂は、語り手の言葉にもうかがうことができる。

A un moment donné, il [Notre-Dame] sortit une main de sa poche, et, comme tout à l'heure, il rejeta avec, en même temps que d'une secousse de sa jolie petite tête, la mèche blonde et bouclée. La foule cessa de respirer. Il acheva son geste en lissant sa chevelure vers l'arrière, jusqu'à la nuque, et par lui je retrouve l'impression étrange : quand, chez un personnage déshumanisé, par la gloire, on discerne un geste familier, un trait vulgaire (voilà bien : chasser d'un coup de tête bruque une mèche de cheveux), qui casse la croûte pétrifiée, par la fente adorable comme un sourire ou une erreur, on aperçoit un coin de ciel. Je remarquai cela déjà à propos d'un des mille précurseurs de Notre-Dame, ange annonciateur de cette vierge, un jeune garçon blond (《Des filles blondes comme des garçons...》) Je ne me laisserai pas de cette phrase, décidément, qui a la séduction de l'expression : 《Un garde-française》 que j'observais dans les ensembles de gymnastique<sup>39)</sup>.

《Des filles blondes comme des garçons...》といった表現では《filles》と《garçons》との間に、《Un garde-française》という表現では《Un garde》と《française》との間に、性的差異は明瞭に刻印されている。しかしその対立は、いかなる意味でも止揚されることがない。対立は対立として維持される。つまり、どちらか一方の同一性が真なるものであって、他方は単なる見せかけや派生物として、最終的にはその同一性に回収されてしまうのではない。

何らかの統一性と見えるものも、その内部に還元できない「部分」を隠している。この引用ではそのことが、必ずしも直接性的でない実例についても、やはり明らかにされている。《la croûte pétrifiée》は、個人に対して規定された、唯一の固定的な性別のメタファーと考えることもできるだろうが、その「殻」は、ノートルダムの何気ない身振りによって亀裂を生じ、結局は完全な統一性を主張することに失敗する。むしろここで強調されているのは、《la fente adorable》や《un coin de ciel》といった「部分」の重要性であり、これらの表現は全体性や統一性といった範疇に還元できない差異が、内部に部分として生じていることを示しているものと考えられる。

### 結論にかえて

我々はここまで、性的差異に関して次のことを見てきた。性的差異は生物学的差異に重ね合わされてはいるが、それに還元されてしまう訳ではない。それゆえ同性の間でも性的差異は生じ、典型的には mac/tante のような対照を成す。その場合、二者の間には様々な形で優位/劣位の構造が見られる。しかしノートルダムのような存在は、この二元論によってはうまく分類され得ない。彼にあっては、性的差異が自己と他者の間に生じるだけでなく、内的には差異が生起しているのである。更に、実はこの内なる差異はノートルダムに限らず、ディヴィーヌや、ミニョンら mac においてすら、観察することができる。つまり、mac と tante の間の権力関係を伴った二元論は、自らの内なる差異を間の差異にねじ曲げることによって、暴力的に成立しているのである。

したがって、間の差異は本質的・超越的なものではなく、むしろ社会的・文化的な構築物に他ならない。抑圧的な権力関係は、その意味で、正統性を主張し得ない不自然な関係ということになる。もし両者の間の関係が純粹に生物学的差異、あるべき自然な差異に基くものならば、そこには支配/被支配の構造が介在する余地はないはずだからである。

ではしかし、性的差異とは、内なる差異のねじ曲げを被っていない自然な差異とは、いったい何なのか？ おそらく我々はこの問いに対して、メタファーで答える以外に術を持たないだろう。最後の引用を見ることにする。

S'il me fallait faire représenter une pièce théâtrale, où des femmes auraient un rôle, j'exigerais que ce rôle fût tenu par des adolescents, et j'en avertirais le public, grâce à une pancarte qui resterait clouée à droite ou à gauche des décors durant toute la représentation. Notre-Dame, dans sa robe de faille bleu pâle, bordée de valenciennes blanche, était plus que lui-même. Il était lui-même et son complément<sup>40</sup>).

女性の役が舞台の上では青年によって演じられるというアイデアが、ここで述べられている。しかし演劇についての言説だからといって、単純に男性／女性を本質／仮象という形で理解し、後者を前者へと還元してしまうべきではない。《pancarte》, 《resterait clouée》, 《durant toute la représentation》といった殊更に念の入った表現は、舞台と揭示との間の分裂した事態を、その緊張・対立の内に維持していると考えられる。舞台は揭示によって、その全体性を主張できなくなる。しかしまた同時に、揭示が唯一の真理であり、舞台の上の役者が青年であると単純に言い切ることもできない。もし青年であるのが誰の目にも明らかであるのならば、そもそもこの揭示は不必要なはずだからである。対立は対立として、止揚されずに維持される。

あるいは、女性の衣服をまとったノートルダムは、《Notre-Dame [...] était plus que lui-même. Il était lui-même et son complément.》と形容される。féminitéを表わす女性の衣装は、彼自身という全体性に対する補足に他ならない。しかし、彼は彼自身以上であり、彼と彼の補足なのであるから、その全体性は補足されるべき欠如によって穿たれており、したがって、彼は常に内部に féminité を、還元不可能な差異と分裂とを孕んだ存在なのである。

揭示と舞台、男性と女性、彼自身と彼の補足とに関して、本質や真実を問うとも、最終的に決定的な答えは与えられないのではないか。自然な性的差異とは何かという問題についても、おそらく事態は同様である。我々は間の差異が本質的なものではなく、文化的構築物であることを指摘し得る。しかし我々が文化の中、象徴体系の中に生きている限り、単にそれが偽りであると言って、問題が一挙に解決する訳ではない。しかしまた、内的差異の抑圧によって成立する暴力的関係が存在する以上、厳密な差異が確定され得ないからといって、問いかける行為そのものの価値を否定すべきではない。

答えは小説の中にはないし、小説の外の世界にも存在しない。しかしテキストとともに、漸近線をたどって見分け難い差異に近づいてゆくこと、これだけは可能である。そして、このようなテキスト、対話を交し続ける終りない旅程の友人であるテキストをこそ、我々は今もっとも、必要としているのである。

## 註

参考文献の引用は日本語で行い、その際翻訳の存在するものは参照させて頂いたが、多少訳文を変更した場合もあることを、ここにお断りしておく。

- 1) Blaise Pascal, *Pensées*, Editions du Luxembourg, 1951, p. 362, (Br. 485, La. 699).
- 2) Luce Irigaray, *Éthique de la différence sexuelle*, Minuit, 1984, p. 13.

- 3) 性的差異を他の諸差異とのからみあいの中で捉える試みとしては、次の研究が参考になる。Barbara Johnson, *A World of Difference*, Baltimore, The Johns Hopkins U.P., 1987. Gayatri Chakravorty Spivak, *In Other Worlds : Essays in Cultural Politics*, New York, Methuen, 1987.
- 4) ある意味でとは、一般的に言って、何らかの形で性的差異が歴史上のあらゆる社会において機能してき、それが常に身体に刻み込まれたきた、という意味である。
- 5) Jean Genet, *Notre-Dame-des-Fleurs*, L'Arbalète, 1948, p. 236. テキストの引用は以下すべてこの版に拠る。なお、ガリマール版では、同性愛の肉体描写等が削除されている。
- 6) tante は女装し、女性の言葉を使う。同性愛で受動的役割を果たすと考えられ、訳語としては「おかま」がおそらく一番近い。mac は女性の売春等の金で暮らす男を指し、「ヒモ」や「女衞」と訳されるが、mac という言葉にはもっとしたたかさや女性に対する蔑視といったイメージが伴っている。
- 7) このセックスとジェンダーとの区別は、方法論的に重要であり必要でもある。しかし同時に、セクシュアリティとはセックスとジェンダーが交差する場であり、こうした二元論自体が問い直され危うくなる地点である、ということをおぼえてはならない。
- 8) この区別に慎重でないならば、女性の存在全体を maternité へと還元してしまう危険を犯すことになる。そうしたイデオロギーが歴史上で果たした暴力については、例えば Kate Millett, *Sexual Politics*, New York, Ballantine Books, 1978, (初版は New York, Doubleday, 1970), pp. 222-249, (《The Models of Nazi Germany and the Soviet Union》)を参照。
- 9) 生物学的決定論とは、筋肉や骨格、ホルモン、性染色体などの何らかの生物学的実体に、性的差異を最終的には回収してしまうような考え方を指す。素朴な決定論がしばしば我々の「男」と「女」を規定しているのだから、やはり警戒は必要となる。ただし当然ながら、より専門的な分野の生物学的研究においては、こうした素朴な考え方は様々な検証にかけられ得る。この点に関しては、John Money and Patricia Tucker, *Sexual Signitures : On Being a Man or a Woman*, Boston, Little, 1975, 及び、Anne Fausto-Sterling, *Myths of Gender : Biological Theories about Women and Men*, New York, Basic Books Inc., 1987.を参照。
- 10) 女性をカッコに入れることは、同時に本論の射程の限界を定めることでもある。男性間の性的多様性への還元が決定的に不能な女性の他者性を、生物学的差異とは別のレベルにおいても、我々は是非とも問題としてゆかなくてはならない。しかしこの点については、また稿を改めて考える必要がある。
- 11) Genet, *op. cit.*, p. 124.
- 12) ( )内の語は直接ゴルギやディヴィーナを形容してはいないが、文脈から見て、それぞれの属性と考えられる。
- 13) 中川久定先生の教示による。記して感謝したい。なお、Alfred Delvau, *Dictionnaire érotique moderne*, Genève, Slatkine Reprints, 1986, p. 219 参照。
- 14) Genet, *op. cit.*, p. 26.
- 15) とともに Ibid. p. 64.
- 16) ここで、この優位／劣位の関係自体を詳しく語ることは残念ながらできない。もちろんこの関係は、精神分析的、社会的、経済的、身体的、などなどの形で更に分析を続けることが可能だろうが、セクシュアリティはそれら諸要素の交点であり、今はこまかい点に踏み込むよりも、大きな優劣関係を確認することがまず重要であると、我々は考える。
- 17) Genet, *op. cit.*, p. 71.
- 18) Ibid., p. 169.
- 19) 《pas-propres》は、単に「不潔な」を意味するだけでなく、「(男性の)固有性ならざるもの、固有性を脅かすもの」を意味すると解釈することも、おそらくは可能である。

- 20) ジュネの場合、féminitéに対立するのは、単にmasculinitéというよりも、むしろ男らしさ、雄々しさを示すvirilitéという言葉である。以下、この対立を用いることにする。
- 21) Kate Millett, *op. cit.*, p. 475.
- 22) Genet, *op. cit.*, p. 81.
- 23) *Ibid.*, p. 177.
- 24) *Ibid.*, p. 100.
- 25) *Ibid.*, p. 159.
- 26) *Ibid.*, p. 163.
- 27) 念のために付け加えておけば、ノートルダムをここでただちに、アンドロギュノスの元型に引き付けて解釈したりすべきではないと思われる。例えば、神話的・形而上学的元型を抽出するエリアーデも、両性具有の様式が極めて多岐にわたり、一般性への還元は危険であることを注意している。Mircea Eliade, *Méphistophélès et l'Androgyne*, Gallimard, idées, 1962, pp. 178-179, note 86.
- 28) Genet, *op. cit.*, p. 79.
- 29) 《muscle》はすぐれて男性的な身体の要素であり、macの描写には頻繁に登場する。また語源的には関係ないものの、音の類似によるmasculinとの結びつきを見ることも、あるいは可能かもしれない。
- 30) Genet, *op. cit.*, pp. 128-129. イタリックはジュネによる。
- 31) この一節から出発して、言語と性的同一性との問題について考察することも可能だろう。ただしこの問題はフランス語、あるいは言語一般の根幹に関わる、非常に大きなテーマである。
- 32) Jacques Derrida, *Positions*, Minuit, 1972. p. 97.
- 33) Genet, *op. cit.*, pp. 163-164. イタリックはジュネによる。
- 34) *Ibid.*, p. 102.
- 35) *Ibid.*, p. 181.
- 36) *Ibid.*, p. 36.
- 37) ここで、ディヴィーヌという「主体」の悪意を云々することは、重要な意味を持たない。また、去勢が伝染するなど語っても、殆ど何も説明したことにはならないだろう。
- 38) ミニオンという名の人物が登場する文学作品は複数存在するだろうが、ゲーテの『ウイヘルム・マイスターの修行時代』は、そうした作品の一つである。ドイツ語でMignonはフランス語とほぼ同じ意味を持つのだが、この作品では、それはボーイッシュな美少女の名前として使われている。
- 39) Genet, *op. cit.*, p. 205.
- 40) *Ibid.*, p. 161.